
別科助産専攻

報告者：大城すぎの

教育及び実践の課題

沖縄県における母子保健の課題は、少子高齢化、核家族の進展に伴い、産後うつ、育児不安、10代の妊娠・出産、子どもの健やかな発達を支援する体制の整備等の充実である。これらの背景には妊産褥婦に社会心理的問題があると推測できる。本科の教育目標のひとつに「沖縄県の抱える課題に応じ、母子の健康を守るとともに、現状を改善する能力を養う」と掲げてあるように、本科の学生は在学中に前述のような課題に対応できる能力を習得する必要がある。

活用した論文の概要

McLachlan ら（2011）の研究の目的は、出産後の女性にケアを提供している助産師のための高度なコミュニケーション技術の教育プログラムを評価することである。半年間にわたり合計7回実施された教育プログラムに参加した21人の助産師を対象とし、受講前後にアンケート調査を行い分析した。その結果、このプログラムを通して参加者（ケア提供者）の能力に一貫した改善がみられ、特にロールプレイは参加者から好評であった。改善がみられた内容には、社会心理的問題について話すように促す時や、積極的に女性へ気持ちを打ち明けるように励ます時、虐待関係にある女性を特定する時、女性たちがどのように感じているのか本音で話すように促す時などであった。また、プログラム終了後には出産後に社会心理的問題をもつ女性を特定してケアするための助産師の自信と能力が高まった。

教育及び実践への活用

本科ではコミュニケーション技術を習得し、その技術を活用しながら臨地実習において妊産褥婦への支援がスムーズに展開できる事を目指し、平成24年度の新カリキュラム移行に伴い助産診断・技術学に「コミュニケーションの基本、助産実践とコミュニケーション」についての演習を新しく組み込んだ。4月からスタートする「コミュニケーションの基本」では、カウンセリングの定義や種類、クライエントとリレーションを築きつつ問題の核心に迫るための技法を講義及び演習を通して学び、5月に開始する「助産実践とコミュニケーション」では、バースレビューと分娩第1期の場面を取り上げてロールプレイを行っている。それぞれのロールプレイの場면을ビデオに撮り、その後全員でビデオを見ながら振り返りをしている。振り返りの場面ではコミュニケーション技法の活用だけでなく、対象者の心理的側面を捉えて傾聴できていたか、共感できていたかなど活発な意見交換が行われている。さらに、このコミュニケーション演習の要素を基礎助産学演習の母乳育児支援の実際やウィメンズ・ヘルスのグループ発表でも取り入れることにより、座学が終了する7月にはアサーティブコミュニケーションができるようになるまでに成長している。今後は学生が習得したコミュニケーション技術を活用しながら、臨地実習において受け持ち妊産褥婦への支援がスムーズに展開できることを期待する。

参考文献

McLachlan H, Forster D, Collins R, Gunn J, Hegarty K（2011）：Identifying and supporting women with psychosocial issues during the postnatal period: Evaluating an education intervention for midwives using a before-and-after survey, Midwifery 27(5), 723-730.

別科助産専攻

報告者：大城すぎの

教育及び実践の課題

新人助産師が直面する問題のひとつに知識と実践上の経験のズレがあるが、学生も同様に座学で学んだ知識を実習の場で活かしきれないというような知識と実践のズレ(ギャップ)を抱く者も多い。本科の教育課程は前期で助産の実践に必要な講義・演習を終了し、後期は学んだことを活用しながら助産実習・NICU実習・ウィメンズヘルス実習・離島実習を行うというカリキュラム構成となっているため、知識と実践のズレを抱かせないような教育内容・方法が課題である。

活用した論文の概要

Skirton ら (2011) の研究目的は、助産学生の教育プログラムが臨床での実践に十分な内容であったのか明らかにすることである。18 か所の医療機関の 35 人の新人助産師を対象とし、日誌を利用しテーマ分析を行った。その結果、助産教育に次のことが奨励された。①正常分娩の大切さを認める一方で、カリキュラムの中でも、理論、シミュレーション、演習を通して、ハイリスクケアが必要とされている状況を与える。②自信をつけさせるために、妊産褥婦がいる病棟や場面を用いたシミュレーションを行う。③自信を持ち、複雑な状況下で決断を下す技術を高めるため、相互的な訓練を行う。④医療製品の扱いに関する内容をカリキュラムに補強し、薬剤投与に関する新人助産師のニーズをより精密に特定する。⑤責任感や決断をする力を養うために、プログラム中の取り扱い件数を検討する。

教育及び実践への活用

Skirton ら(2011)の論文において参加者の事例に即した学びは、経験をもって一番よく得られるという認識が示されているように、H24 年度のカリキュラム改正に伴い単位数を増やし、演習内容を見直した。基礎助産学演習では母乳育児支援の実際として、乳房模型や新生児人形を用いて褥婦への指導のロールプレイを取り入れた。また、助産診断・技術学演習では、コミュニケーションや観察技術の複合的な習得を目的とした新生児家庭訪問のロールプレイ、ハイリスク事例を学ぶために紙上事例の助産展開などを組み込んだ。その結果、学生たちは講義で学んだ知識をロールプレイで実際に活用することで、「思ったよりも難しい」、「なるほど」などと思う体験をしている。さらにシラバスへ助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度(76項目)を表記し、学生自身が把握しやすいようにした。カリキュラム改正後の学生の卒業時の到達度を見てみると、半数以上の学生が厚生労働省の示す到達度に達している項目は26項目から41項目に増えた。新たに増えた項目は、妊娠期の診断とケア、正常分娩、異常状態、出産・育児期の家族ケア、中高年女性に対する支援である。このことより、新カリキュラムで強化した教育内容の成果が現れていると考える。今後は演習の成果を臨地実習と関連させて、知識と経験の関係性について評価することが必要である。

参考文献*

Skirton H, Stephen N, Doris F, Coopre M, Avis M, Fraser D(2011) : Preparedness of newly qualified midwives to deliver clinical care:An evaluation of pre-registration midwifery education through an analysis of key events, Midwifery, In Press, Corrected Proof, Available online 25 September 2011
